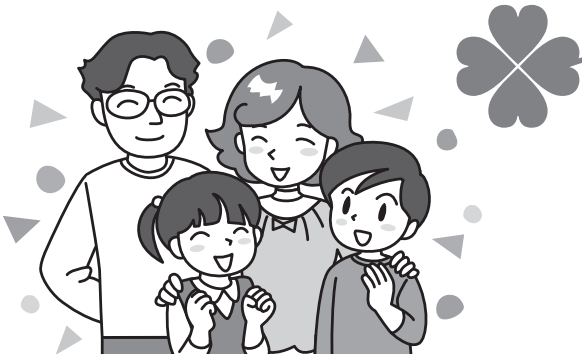


悩まなくてもだいじょうぶ

知っておきたい アレルギーの話

NPO法人アレルギーを考える母の会
代表 園部まり子

イラスト／清水直子



第36回

お母さんたちは大丈夫？

❁「自分のことは後回し」 では心配

「母の会」は子どもたちのアレルギーにかかわる機会が多く、皆さん確実に健康を回復されていますが、中には保護者の方が重い喘息などで苦しんでいるケースもあります。ところがわが子のごとくに「生懸命で自分のことは後回しにして、十分な治療効果を上げていないことも多く、しばしば心配な方に出会います。

何人か残念なケースにも出会いました。一人は私の子どもが通っていた小学校のPTA役員を一緒にされていた方でした。役員の最後の仕事で忙しい時期、喘息発作が長引いているにもかかわらず「この程度は慣れっこ。大丈夫」と、「発作止め」の薬を使い続けていました。ところが無理が重なり、気づいたときには治療も間に合わないほどの大発作を起し、亡くなってしまいました。当直中に亡くなった救急隊員もいました。神奈川県のある市の隊員が夜間当直を終え朝になったのに起きてこないで、不審に思った同僚が起しにいくと、ベッドの中で息絶えていたというのです。解剖の結果、喘息の発作が原因で亡くなったことがわかりました。奥様からうかがった話では、喘息と診断され「発作止め」の吸入薬を処方されていたものの、医師から「あまり使うと危険」と言われていたので結局、薬箱にしまったまま使わずに済ませたの末の出来事でした。喘息で亡くなるのは高齢者と思われがちですが、実は働

き盛りの方の無理がたたって、というケースも少なくありません。

❁ 親にとっても大事な 標準治療

喘息の治療は大きく進歩したことを知っていたことが大事だと思います。かつては「我慢の治療」といわれ、発作を止めることが治療とされていたのが、今では「発作を起ささない」、少し難しい言葉で気道の慢性的な炎症をなくす治療が標準治療になりました。そのため治療の基本は医師の処方での「吸入ステロイド薬」を使うことですが、紹介したお二人は、「発作止め」の薬しか処方されていませんでした。子どもだけではなく、親にとっても標準治療を知ることの大切さを痛感します。



そのべ・まりこ ● 神奈川県社会福祉協議会セルフヘルプ支援事業運営委員。困っている患者と専門医との橋渡しを第一に「治療ガイドライン」情報などの提供、専門医による講演会や会報発行、行政への働きかけを行なっている。共著に『食物アレルギーの手びき 改訂第2版』（南江堂刊）。